



DRAMA かながわ No.97

Theater Association of Kanagawa

2025年度 神奈川県演劇連盟合同公演「KNOCK UP」

第23回かながわ演劇博覧会

僕らの演劇：プラスチックな月、虚空環幻想レーゲンハイト
資料室だより ほか



2025年度 一般社団法人 神奈川県演劇連盟合同公演



『KNOCK UP』

2025年12月18日(木)～21日(日) 神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール

【総評】 中山朋文 (theater 045 syndicate)

一般社団法人神奈川県演劇連盟 (TAK) 合同公演は、加盟する団体が、その垣根を越えて年に一度共に芝居作りをする公演です。プロの演劇の現場で仕事をしている方もいれば、フルタイムで会社勤めをしながら参加されている方もいらっしゃいます。参加者も様々な顔ぶれで、演劇的なキャリアも、演劇との距離感も十人十色。

そんな座組で今回取り組んだのが『KNOCK UP』。初日を直前に控えた劇団が、トラブルに見舞われながらやけくそ気味に荒波を乗り切ろうとするお話で、演劇の舞台ウラをテーマにしたコメディ作品です。

作家の坪井俊樹さんは、ケル・ペッパー／劇団スクランブルの主宰で作・演出をされています。私も何度か坪井さんの脚本で演出をさせていただきました。坪井さんの本の面白さは、軽妙なやり取りと人物描写の解像度の高さにあります。登場人物の人間性のスキマをつき、欲や弱さや愚かさが、やがて愛おしさに変わっていくような、そんな本だと思っています。

今回は舞台ウラがテーマなので、ふだんはお客様にお見せすることのない、舞台の裏側から見ていただくこと、舞台上に客席を作りました。お客様には劇場入り口ではなく、楽屋通用口から入って、舞台ソデを通過して舞台上の客席に入ってくださいました。座席は舞台上の盆のふちにそったかたちに設置しました。緞帳は降りたまま、舞台美術が組まれていない、いわゆる「素舞台」の状態、舞台ソデや劇場壁の機材や綱元などはかくさずにそのままむき出しにしてあります。お客様に「劇場」という空間を存分に楽しんでいただけるよう、文字通りの舞台ウラをツアーしているような体験を提供しました。

あらすじは、公演初日を間近に控えた劇団が、出演者のボイコットにより上演中止の危機に立たされる。そこに突然、海賊船が轟音とともに劇場に現れる。いつの時代か、どこの国からか全くわからないが、3人の女海賊が劇場にだれ込む。次々と起こるアクシデントに、劇団員たちは演劇人ならではの知恵と「The Show Must Go On」の精神で海賊たちと共に芝居を作り、ボイコットの危機を乗り越えようとする・・・という荒唐無稽なストーリー。パニックの中で起こるドタバタとすれ違いを軽妙に描くのは坪井氏の真骨頂であります。

盆や緞帳などの機構をふだんに利用し、劇場の客席もアクティングエリアとして使用するなど、紅葉坂ホール全体を大きな舞台とし、照明や音響効果など、演劇ならではのマジックが目の

前で繰り広げられる「体験型」の作品に仕上がりに、お客様には驚きと笑いをもってお楽しみいただきました。

異世界転生コメディの設定ではありますが、「異文化交流」と海賊という「武力」の前に「演劇」がどう向き合うか、ということを念頭に置いて演出をしました。



今回で私が合同公演を演出するのは3回目となります。毎年毎年、難儀な現場です(まあ簡単な現場などないのですが)。しかも昨年度の合同公演は2025年の3月に上演しました。年度が変わったとはいえ、昨年は2回合同公演が行われたこととなります(紅葉坂ホールが改修工事に入るため、この日程になりました)。

「年2回ってなんだよ！時間も無い、人も足りない、カネもない・・・師走はゆっくりさせてくれよ！」なんて恨み節ばかりでしたが、「・・・ちょっと待てよ、これってこの本と同じシチュエーションじゃないかっ！」と気づき、仲間と共に急ピッチで作り上げました。

Weblio英和辞典によれば、『KNOCK UP』という英語には、以下のような意味があります。

- ①打ち上げる、突き上げる、払い上げる
- ②ドアをたたいて(寝ている人を)起こす、戸別訪問をする
- ③疲れさせる、くたくた[へとへと]に疲れる、病気になる
- ④大急ぎで作る

③と④は今回の芝居と完全に一致した2025年度の合同公演でした。

演劇という表現方法でしかなしえない作品であり、師走の忙しい最中に、笑いとおちょっぴりあたたかい時間をお過ごしいただけました。ありがとうございました。



参加者の声

私自身、11月中旬まで自劇団（劇団横濱にゆうくりあ）の本公演に演出として参加していたため、その約1ヶ月後に控えた今回の合同公演への参加はできないと諦めていた。そんな中、自劇団公演終了の3日後に演劇連盟理事で今作の演出である中山朋文さんから直接声をかけていただき、キャストとして参加することになった。今回の舞台は坪井俊樹さん脚本への初出演ということもあり、ワクワク感もあった。とはいえ、自分自身、演者として舞台上上がるのは1年4ヶ月ぶり、かつ合流から1ヶ月で芝居を創った経験もなく、今までとは種類の違う不安や緊張感があった。救いだったのは、演出の中山さんをはじめ、2回前の合同公演と一緒に芝居をつかったメンバーが多く参加していたことだ。おかげで、途中参加の状況でもスムーズに入ることができた。

今作の特徴として、会場全体を含めた舞台の使い方が挙げられる。舞台上に客席を置き、通常時に客席となるところで演じる。とても勉強になったし、お客様からも多くのご評価をいただいたのは嬉しかった。

今回の役どころは、海賊船が劇場にタイムリープしてくる話の中で、その劇場の館長役。まじめな役を想定していたが、全く違い、笑いをとれる滑稽な役回りであり、おいしい役であった。絡む役者さんの演技も相まって役割を果たすことができた。本番を

観ていただいたお客様からは、「今までで一番面白かった」「おいしい役だったね」など感想をいただいた。

さいごに、謝意を添えたい。稽古期間から本番までを通して、裏方として精力的にメンバーをサポートしてくれた川島ショウさんの貢献は大きかったと思っている。稽古場は若いメンバーが多く、自分のようなセリフ覚えの悪いオジサンは少し迷惑だったかもしれないが、多くの仲間を支えられている感覚を特に感じた公演であった。関係してくださった皆様へ、ありがとう。

文：坂下優一（劇団横濱にゆうくりあ）



劇評 2025年度 一般社団法人 神奈川県演劇連盟合同公演 『KNOCK UP』

面白かった！まずは開場とともに案内されたのが、舞台袖から・・・。なにやら舞台人である私には、乗っけから「やられた！」の期待感を持たされた。素舞台の中に客席がある。勿論ノーセット。客はホリゾント側に座らせられ、緞帳の裏側を見せられる。我々には慣れている光景だが、一般の客にとっては、見慣れない光景だったと思う。客席は廻舞台の盆の外ギリギリに座ることとなる。パー灯の中、突然舞台監督が現れ、諸注意を始める。しばらくすると袖から一人の演者が現れ、まさに紅葉坂ホールでこれから始まる舞台前のドタバタがいよいよ始まる。

よく我々が経験しそうで、くすぐられる本番前の台詞が飛び交い始める。どうやら漁船と漁師が出てくる芝居らしく、漁師たちが来られない状況の中で、なぜか本物の海賊がやってきて、いつしか飲み込まれて演者となり・・・とまさに奇想天外な、話が繰り広げられる。

ノーセットの舞台で進むなか、途中で緞帳が飛ぶと、センターの客席が現れる。その途端、私には何と贅沢なセットだと感じた。客席やセンターの舞台機構丸ごとを使った演出プランは、面

白かった！

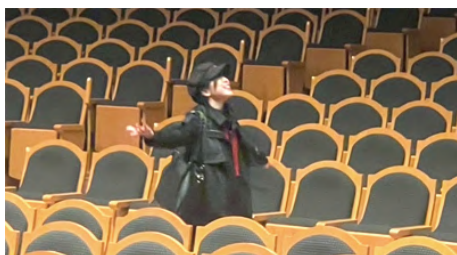
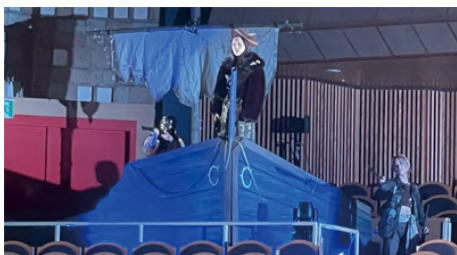
現実と奇想天外なフィクションと訳のわからない時代考証が入り混じった、愉快で心地よいカオスの世界が繰り広げられてゆく。このハチャメチャな空気感も面白かった。

この舞台空間の使い方は、我々関係者にとってもくすぐられる面白さを感じたであろうし、一般の観客にとっても舞台裏を見ることができるのは、普段の客席側の世界とは違った、新鮮な面白さを感じていたであろうと思われる。少ない観客と広すぎる客席とを意識して苦肉の策から発想したのかもしれないが記憶に残る舞台だった。

テーマは？とかりアリティーにかけるとか、ちょっと荒っぽすぎるんじゃないとか・・・重箱の隅を突くのは意味がない。面白い娯楽作品・・・。それでいい。

観客のアンケートを我々が読む時、ただ面白かったの意見は意外と飛ばして読みがちだけれど、私が今回の芝居のアンケートを書くとしたら、一言。『面白かった』

文：横田和弘（劇団河童座）



第23回かながわ演劇博覧会

2026年3月6日(金)・7日(土)・8日(日) 神奈川県立青少年センター スタジオHIKARI

3/6 12:00-16:00	劇団Q*社会人部 『大山崎本一匹』
3/6 13:00-17:00	劇団カレイス ノラ猫 『心臓再生方程式』
3/6 14:00-18:00	赤わく隊 『解決しなや駄目ですか?』
3/6 15:00-19:00	黒船 『テンチュウ』
3/7 12:00-16:00	劇団まきじゃく 『短編集「取道を奪ると」』

3/7 13:00-17:00	かどる 『命のしらたひ』
3/7 14:00-18:00	劇団「無題」 『ごちん様支援隊』
3/7 15:00-19:00	シアターあさぎり 『はつげん白を低くす』
3/8 11:00-15:00	EKISHA 『その夜の心』
3/8 12:00-16:00	劇団てとて 『はかばか』

3/8 13:00-17:00	劇団年輪 『Goodbye, My Dear Grandma.』
3/8 14:00-18:00	劇団コピュラ 『心は青、空は白、雲は黒』

時間	3月6日	3月7日	3月8日
11:00~	観劇14分上映	観劇あさぎり	EKISHA
12:00~	観劇あさぎり	観劇てとて	観劇てとて
13:00~	観劇カレイスノラ猫	観劇あさぎり	観劇あさぎり
14:00~	観劇黒船	シアターあさぎり	観劇あさぎり
15:00~	観劇	シアターあさぎり	EKISHA
16:00~	観劇あさぎり	観劇あさぎり	観劇てとて
17:00~	観劇カレイスノラ猫	観劇	観劇あさぎり
18:00~	観劇あさぎり	観劇あさぎり	観劇あさぎり
19:00~	観劇	シアターあさぎり	観劇あさぎり

【総評】 宮田信宏（劇団年輪）

■はじめに

イベントの事務局長を初めて担当させていただきました。劇団年輪の宮田です。今年の「かながわ演劇博覧会」も、神奈川県内で活動する数多くの演劇団体の皆様と共に創り上げることができました。地域の演劇文化を一堂に会し、多様な表現や人材が横につながる場としての意義を強く感じています。準備から当日まで、多くの出会いや発見があり、演劇を通じたつながりの力を強く実感しました。

本稿では、イベントの特色や成果、関わってくださった方々への感謝、次に向けた思いをまとめます。読者の皆様に、イベント全体の風景が伝われば幸いです。

■関係各位への御礼

本イベントにご協力いただいた神奈川県演劇連盟の皆様、参加団体の皆様、ボランティア・スタッフの皆様、行政・スポンサーの皆様、ご来場の皆様に、心より御礼申し上げます。皆様のお力添えで、各団体が実現したい表現を最大限発揮していただけたのではないかと思います。開催に向けてご相談に乗っていただき、当日は笑顔で支えてくださった皆様に、改めて感謝いたします。設営や運営をはじめ多岐にわたるご協力、ありがとうございました。

■今年の博覧会で印象に残ったこと

今年も12団体の皆様にご参加いただき、それぞれの創造性や表現の幅広さから「演劇の多様性」を改めて感じられる催しでした。演目・演出・テーマに至るまで個性豊かで、出演者の熱量や工夫も印象的でした。演目が入り替わるたびに会場の空気も変わり、まるで小さな旅を続けているような濃密な一日でもありました。

ご来場のお客様には、12団体の独自の色が存分に伝わったのではないのでしょうか。「知らなかった演劇」「意外な発見」「この団体の作品をもっと見たい」など、鑑賞を通して多様な楽しみが生まれていたように思います。初めて観劇に来られた方にも、お馴染みの観客の方にも、それぞれの楽しみ方があったのではないのでしょうか。

ひとつの会場でこれほど多彩な表現に出会える場は他にあまりなく、県内演劇の交流・発展の拠点となっていることを実感しました。

■運営・事務局としての振り返り

これまでの課題を踏まえ、団体交代時の会場が静まり返る「下調（無音）」を解消するため、転換中も音楽を流し続ける方式に改めました。無音で落ち着かない雰囲気減らし、イベントの流れを途切れさせない工夫ができたと感じています。

また、各団体の上演前に「特徴」「成り立ち」「名前の由来」などを紹介する時間を新設し、演目だけでなく劇団そのものに興味を持って鑑賞していただける流れをつくり、各団体への理解や親しみが深まったのではないかと考えています。

コロナ禍以降最大規模の客席を安全かつ快適に収容できるよう、配置と動線に細心の注意を払いました。

不慣れな点も多いなか、関係者の皆様にご容赦いただきながら進めてまいりました。いただいたご指摘やご提案は、次の運営に活かしてまいります。今後も運営の質を高め、より多くの方に喜んでいただける催しを目指します。



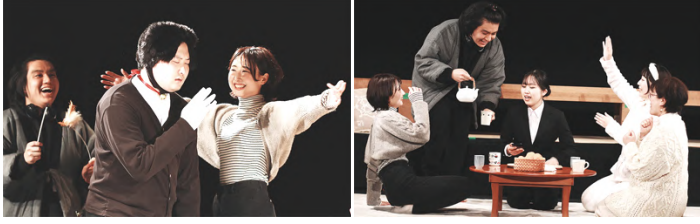
■締め — 次年度・演劇の場へ向けて —

今年もご参加いただき、ありがとうございました。舞台の上だけでなく、袖や客席、準備にあたる方々まで含めて、ひとつの催しとして熱量を分かち合えたことが、何よりの励みです。次年度の「かながわ演劇博覧会」は、今回の経験を活かし、より多くの皆様に喜んでいただける催しとなるよう精進してまいります。

皆様のご期待にお応えできるよう努めますので、今後ともどうぞよろしくお願いたします。

劇評 第23回かながわ演劇博覧会 ①

■劇団Q+ 社会人部『大山鳴動ネコ一匹』



穏やかな家庭劇かと思えば、「先生」、「波動が上がる」と、会話のはしばしに奇妙な言葉が差し挟まれ、みるみる不穏な気配が立ち上る。母とその友人の衣装の白さも恐ろしい。終盤、不在の父への「愛しているなら不倫するはずがない」という長女の訴えが胸に迫るが、しかし「愛しているのに不倫してしまう」人間のわりきれなさを描くのが演劇ではなかったか。その意味で、カルトに傾倒する弱さと家族を愛する強さの双方を、むりなく体現し得た母親役の俳優の存在感が見事。作家の切実な問題が全体にごろりと詰め込まれている。書き続けてほしい。

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

■劇団カレーライス ノラ猫『心肺蘇生方程式』



作・演出の鳥海リョウ氏の楽曲から生まれた物語とのこと。三途の川のほとりで、死に損ないの男と死神の軽妙なやりとりが描かれる。「しゃべる時に必ず苦虫をかみつぶしたような顔をする」、「動作、身ぶりに根拠がない」等、言いたいことはいくつもあるが、それも野暮だ。初めての脚本、それだけで祝祭だ。来世コーディネーターたちの白いスーツと翼の表現がすばらしい。演技にも思いきりがある。生き返りの試練が「女性の心理がわかるか」であることに作劇上の狙いを読み取れずハラハラしたが、ラストのせりふと呼応してホッとした。書き続けてほしい。

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

■赤ねく隊『解決しなきゃダメですか？』



優しく、あたたかな探偵ものがたり。徹底的に「善人」として探偵および助手が描かれているのがとてもよかった。ハードに突っ張らなくとも、人は人を救う強さを示すことができる。探偵の助手の「心の声を読む」というギミックも演劇的で素敵だった。やりとりの最中に、心の声（録音）を通してのツッコミや会話がシームレスに差し挟まれるのが楽しい。探偵役の方をはじめ、全員が「演じること」をまっすぐ引き受けているのが心地いい。「全身全霊でとにかく相手を褒める」という冒頭のくすぐすが、ラストに回帰する構造にもカタルシスがあった。

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

■黒船『テンチュウ』



奇跡のような上演だ。各々が主宰として劇団を率いる四人が、初期衝動の塊となり舞台の上に光り輝く。円熟した演技に新鮮な衝動が重なればもう無敵だ。中山氏の可憐さ、緑氏の強靱な眼差し、中西氏の制御を踏み破る身体、坪井氏の自然な呼吸、いきいきとした四人をずっと観ていたい。テキストが巧みで、壮年男性が敬体で会話を交わすだけでももう面白い。一つの包みに場が支配される手さばきの何と洒脱なこと。金だの名声だのコンテンツとしての未来が云々だの、演劇を手段として扱うクソどもの毒に辟易する者はみな、この舞台を観てほしい。ここに希望がある。

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

■劇団まきじゃく『坂道を登ると』



短編2本立て。『いつか王子様が』：役場から王子が、女性のもとへ派遣される話。設定が面白そうでしたが、その設定が活かされてなくというか曖昧なまま、中盤から女性も王子に乗っかり終始、ギャグ？合戦になり、軸がわからなく散漫な印象でした。『ヨダカの星』：異星人と女子高生との対話。学校の教室を舞台に、退廃的だけど、夕日の演出、女優2人の透明感のある演技も相まっての空気感が秀逸で、削ぎ落とした最低限のセリフと間に入る映像メッセージのやりとりで、見る側の余白と余韻にずっと入ってくる感じが心地よかった。リアリティのある閉塞感の演出もお見事。なんとも言えぬ世界観に魅入ってしまいました。

文：坪井俊樹（ケル・ペッパー）

■かどる『命のせんたく』



女性4人の銭湯での会話劇。達者な女優さん達の自然なやり取りや、お風呂上がり感な立ち振る舞いはお見事。銭湯での女性はこんな感じなんだ、と覗けない部分を覗けた気分になりました。ただ、話の本題に入り始めるのが遅く、それまでが平坦過ぎたのと、銭湯の女将的な役割の人物がラストの方で母親への本音を吐露するのだが、それが「何故か？」をずっと吐露し続けるので、もうわかったわかった！ってなってしまう、いかにも見せます！見せ所です！と感じてしまい、前半の自然体な雰囲気が無くなってしまい、構成の拙さが目立ってしまった印象でした。

文：坪井俊樹（ケル・ペッパー）

劇評 第23回かながわ演劇博覧会 ②

■劇団「無題」『こちら妖怪支援課』



妖怪達が生活における悩み相談事、または抗議などをしに来る支援課が舞台。シチュエーションが面白そう！で終わってしまった印象です。衣装やメイク、小道具、備品などの細かい部分がいマイチでまず世界観に入り込めなかった。また、妖怪ならではの悩みも出オチに使われただけで、途中からこの人達は妖怪なの？コスプレした人達じゃなくて？と思ってしまった。結局決め事もカラオケ大会になり、みんな楽しそうで、悲劇感がなく、笑わせにきていて、妖怪ならではの！というシチュエーションが中盤から感じなくなり、結局なんだったの？という印象でした。

文：坪井俊樹（クエル・ペッパー）

■シアターあさぎり『はつ雪が白きを焦がす』



どんど焼きという伝統行事に使うお餅を作るために集まったかつての同級生達の会話劇。終始自分達の思い出の状況説明セリフと感情の説明セリフばかりで、現実と地続きな会話劇なのに、生活感がなく現実と社会を遮断された印象で、窮屈に感じました。20代半ばの会話にしてはなんか、登場人物に生活感が一切無くなり込めなかった。現状の愚痴や見栄など誰1人喋らなく、同級生の設定が活かされた印象はなかった。演出的にも餅は捏ねているのに、話の軸に感じた、赤ちゃんとラストの雪がマイムで表現というのも何だか詰め甘さが残った。

文：坪井俊樹（クエル・ペッパー）

■EKISHA『その探偵の名、』



即興劇8割、台本2割で行われる「コンセプトインプロ」を初めて目の当たりにした。前半の設定やあらまは台本で進むが、殺人事件の発生以降は、指示された感情に沿って展開する即興劇となる。台詞の一言一言に耳を澄ませながら、次にどんな展開になるのかとわくわくし、時には苦笑いしながら一緒に推理していた。観客とともに何度も作り上げられる、“その時”にしか存在しないストーリー。主役の女子高生・迷探偵が決めた台詞の「わかったわ」と叫んだあと、何もわかっていない推理にもかかわらず犯人が当たってしまうという奇跡。その瞬間が、この舞台でいちばん面白かった。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■劇団てとて『おかゆ』



稽留流産してしまった母親と、生まれてくるはずだった子どもの会話から始まる物語。流産したことで孤独と絶望を感じ、塞ぎ込んでしまう母親。やがて、生まれてくるはずだった子どもは三人に増え、母親の記憶の扉をコミカルに再現しながら開けていく。演じる四人の役者がとてもキュートで愛おしい。テンポの良い楽しい会話に笑いながら観ていたはずなのに、いつの間にか涙が頬を伝っていた。「愛」とは、いかに伝えることが難しく、そして儚いものなのか。あの日、母が作ってくれた「おかゆ」は、何よりも美味しく、そして温かい。素晴らしい舞台でした。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■劇団年輪『Goodbye, My Dear Grandma.』



おばあちゃんが亡くなり、孫たちが集められ、ゲームをして遺産を受け取る。殺人事件でも起きそうな設定だが、おばあちゃんの愛に包まれた、とても優しい物語だった。三人の孫はヒントを頼りに隠された手紙を探す。手紙を読むたびに、おばあちゃんとの思い出と愛情を存分に感じる事ができた。オープニングや回想シーンには映像が使用され、とても華やかだった。おばあちゃん役俳優はとてもパワフルで素敵だったのだが、あのおばあちゃんなら生前にもっと伝えることもできたのではないかと感じてしまったのは、ここだけの話である。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■劇団コピュラ『若芽 wakame』



コントとは何か。演劇とは何か。即興とは何か。草とは何か。そんなことをいろいろと考えていた。ちなみにコントとは、主に1~20分程度で演じられる台本に基づいた寸劇形式のお笑いネタである。特定の役柄になりきり、衣装や小道具、セットを用いて世界観を作り上げ、ストーリー仕立てで笑いを取るのが特徴だとも書かれている。役になりきり……うん、演劇なんですよ。演劇の一部なんですかね。結局、考える必要はなかった。笑えるものは笑えるし、笑えないものは笑えない。舞台上で演じる役者たちの楽しそうな雰囲気を見ていたら、あっという間に終わっていた。コントも演劇も、面白いものは面白い。それでいいと思う。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）



僕らの演劇



プラスチックな月『からくり人間は宝船の夢を見るか?』

2026年1月16日(金)~18日(日) kichika



この公演の題名を見て非常に興味を掻き立てられた、というのは私が以前読んだ小説SF作品『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』からヒントを得た作品であることが推測できたからだ。有名なSF映画『ブレードランナー』の原作としても知られているこの作品は、アメリカのフィリップ・K・ディックにより1968年に書かれたものだ。核戦争後の荒廃した地球を舞台に、賞金稼ぎのデッカーが逃亡したアンドロイドを追う物語。彼は任務を遂行しながら、アンドロイドと人間の違いに疑問を抱き始める。「人間らしさとは何か」「感情とは何か」「人間と人工知能(アンドロイド)との違いは?」といった問題に対する鋭い洞察と葛藤が描かれている。AIが人間のような感情や想像力(夢)を持つことができるのが話題になっている現代だからこそ、この作品に含まれる哲学的命題が現実味を帯びてくる。よろしければご一読されることをお勧めしたい。

失礼、原作愛が強過ぎて熱く語ってしまった。本題に入ろう。「プラスチックな月」は、落語を題材とした時代劇をする劇団であるが、屋敷に入る時にファミ○ーマートの入店音がする、BGMにスタンド・バイ・ミーがかかるなど時代考証お構いなし、個性的で面白い舞台を創る劇団である。最近は劇団本体での活動がなく、今回が5年ぶりの公演だ。

舞台が始まるとまず観客は、過去か未来か、人間なのか機械なのか、様々な疑問の中に突き落とされる。時代背景は江戸時代らしいが「からくり」と言われるアンドロイドが登場する。物語は江戸の町を焼き尽くす大火事から始まる。そこで記憶を失った少年「与太郎」は燃え盛る炎の中で、からくりの「おちゃと」に救われる。「おちゃと」はその時代に活躍する他のからくりと違い、かなり高度な頭脳を持っていて夢を見る。さらには自我の成長も見られる。そんな「おちゃと」に対し、からくりを製造する工房の研究者であり、仕立て直し(分解・修理)をしようとする冷静な観察をする「でっ公」。一方、「おちゃと」に友達として愛情をもって接する「与太郎」。その二人を軸にして話が進む。

前出の小説の登場人物「デッカー」が「でっ公」として、「イジドア」が「与太郎」として描かれているのが観て取れる。しかし小説のディストピア的世界とは違い、舞台は人々とかからくりとの交流が江戸長屋の人情噺として描かれ、ところどころに落語の小話が盛り込まれて、ほのぼのとした仕立てだ。また、それぞれの役者さんの個性的なキャラクターが良い。話の最後で、かつて人工知能が人間を滅ぼそうと起こした戦争があったが、そこで生き残った人々が300年間平和だった江戸時代を理想として再現したのがこの舞台の世界であることが種明かしされる。アンドロイドを落語の人情噺的な優しい世界で登場させた理由がここにあったわけだ。

今回の舞台、正直いうと情報の詰め込みすぎのきらいがあり、元ネタを知らないとわかりにくいのではないかとも思えたが、この劇団の挑戦、独自性、冒険性を支持したいと思う。次回の舞台も観に行くつもりだ。さらなる活動を期待したい。

文：野比隆彦

虚空幻想レーゲンハイト『Fiaba Fantasia ~イカした童話のはじまり~』

2026年3月19日(木)~22日(日) 神奈川県立青少年センター スタジオHIKARI

物語は現代日本の少年が「童話世界」という異世界に飛ばされたところから始まる。童話世界、それは様々な童話のキャラクターたちが生きる世界。幼いころから読んできた物語の主人公や悪役たちが所狭しと活躍する。

主人公は転生した少年だが、全員主人公の群像劇とっていいくらいに全員が生き生きと動いていた。人数は多いけれども、みんな馴染み深い童話の登場人物であり、かつキャラが立っている。覚えるのに苦労はしなかった。シンデレラ、白雪姫、桃太郎といった主人公キャラはもちろん、オオカミ、ハートの女王などの悪役、さらにチェシャ猫、帽子屋といった悪役の手下までどこか憎めない魅力がある。作りこんだ衣装と、エネルギー感ある演技力がそれを支えている。どのキャラクターも個性的で大変惹きつけられた。

転生した少年の魂はこの世界に住むアインという男の体に入り込んでしまう。アインの魂ははじき出されて丸っこい形の魂となり少年のそばに漂う。ここの表現が実に面白い。

今回の劇ではパワーマイムという演出がとられている。ほぼ何もない舞台で、演技と解説で状況を表現することにより、頭の中にリアルな情景が思い浮かぶ。パワーマイムを使うことによって、大道具入れ替えのための転換などもなく、テンポよく物語が進んでいた。勢いのある演技と相まって、非常にスピーディーな展開を実現しており、約二時間という上演時間もあっという間であった。

少年たちはそれぞれの目的で旅をしているアリス、赤ずきん、かぐや姫たちと出会い、仲間になる。そこへハートの女王が差し向けた刺客たちがやってきて戦闘が始まる。バトルシーンは迫力があり、クオリティが高い。大勢の役者が各々の武器を振り回して戦いながらも決して不慮の衝突などの事故を起こすことなくスムーズ。銃声や剣などの効果音も見事にタイミングが合っている。練習量の多さがうかがえた。舞台ならではの迫りくるような空気感があり、非常に満足した。

バトルやシリアスシーンだけでなく、コメディ要素もあり良いアクセントになっている。即興アドリブシーン、コロコロと口調が変わる多重人格キャラ(七人の小人を内に秘めた白雪姫)、台本で三行にもわたる長い名前を持つ長靴を履いた猫など、これは役者たちは大変だろうと思うシーンもあった。役者たちが楽しんで演じている雰囲気が伝わり、こちらも楽しくなった。

ラストバトルに決着がつき、最後はまたそれぞれの目的のために旅立っていく。少年冒険漫画の第一話を思わせるような、想像の広がる良いエンディングだった。キャラクター、そして世界観がしっかりと作り込まれているので、ワクワクする冒険世界が心の中をどこまでも広がっていく。本当に続編を作る予定なのかもしれない。その時はぜひまた観劇したい。この世界、「童話世界」の続きをもっと観たいと強く感じた。

文：穂村一彦(劇団「無題」)



演劇資料室からオススメの一冊

「野田秀樹の非国語」（野田秀樹 著/マドラ出版）

「広告批評」の主宰であり、出版元・マドラ出版の社主でもある天野祐吉の提案で1991年に生まれたテレビ東京の深夜番組「夜中の学校」は、糸井重里、淀川長治、秋元康などを筆頭に時代を担う言論人が一般から応募した30人の生徒に向かって講義する内容をそのまま番組にしちゃうという味わいのある企画だった。その中で、野田秀樹は91年11月から5週にわたって講座を受け持った。それをまとめたのが本書である。

野田秀樹と言えば、夢の遊眠社の舞台で台詞が飛んで、10分以上延々とアドリブを続け、その後突然にして台本に戻したという伝説の持ち主である。言葉が自由に空を飛び、翻ってどこへ行くのか？想像するだけでも楽しい。案の定、この講座でもその第一話から「味の素、女優の素顔、ズブの素人」と全く関連性のなさそうなキーワードを並べて聴講生たちを煙に巻く。しかし読み進んでいくと、単なる言葉遊びではなく、役者として必須ともいえる言葉への感性を鋭く、味わい深く、的確に解き明かしていくのだ。さらには、ドイツ帝国の成り立ちの立役者である鉄血宰相・ビスマルクを引き合いに出し、それを引き継いだヒトラーの成功の秘訣にまで踏み込んで解き明かす。話の展開はジェットコースターのように、あっちへ飛びこっちへ下り、一気に加速したかと思えばゆるゆると流れたり、まあ自由闊達と言えば聞こえはいいが、メチャクチャともいえる流れ。でもお終いにはちゃんと着地して見せるのが流石である。

まるで夢の遊眠社の舞台のようにとんでもない展開や論理の開陳が第二話以降も続くのであるが、いずれも「言葉」にまつわる野田独特の視点に立つ遊び心満載のエピソードをスピーディに連ね、ある時は哲学的に、またある時は綿密に練り上げられた舞台の感覚を思わせるようなバラエティ豊かな筋書きに従って、さま

ざまな問いかけを聴講生たちにぶつけていく。読んでいて気付くことがあった。講座の過程で例題として持ち出す作家評だったり作品をおちゃらけとも思える言語表現で提示して見せるのだが、実はそれは時間をかけて周到に用意されたのではないかということ。聞き始めは確かに戸惑いを隠せないのに終わってみると納得しちゃう。その感覚はこの本の中に登場する聴講生たちだけでなく、読者である自分でも感じ取ることが出来た。例えば、森鷗外は入試に出せる、でも筒井康隆はムリ！とか、村上春樹の作品を七色のキャラで読み比べてみようとか、まあ自由自在。とんでもない飛躍かもしれないのに、終わってみるとしっかり着地させ、聴講生たちはストーンと腑に落ちている。

読後感としてあるのは、この講座は野田にとってある種の演劇的空間演出の試みではなかったかということ。聴講生たちは、観客であると同時に共演者であった。夢の遊眠社の舞台は、アドリブが自由闊達に飛び交いそれでもきちんと着地させてみせるというイメージがあるのだが、この本からもそんな匂いを感じた。とにかく面白い！読者諸氏には、ぜひ我が演劇資料室をお訪ねになりご一読されることをお勧めする。面白いだけでなく、言葉のエネルギーやその魅力に触れるまたとない機会となるはず。夢の遊眠社の舞台を迫体験できるかのごとく、お勧めの一冊だ。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）



劇作家・演出家の野田秀樹がテレビ東京の深夜番組「夜中の学校」で行った講義をまとめた一冊。森鷗外や筒井康隆、村上春樹などの作品も引き合いに出しながら、言葉の響きや意味の広がり、表現の可能性を自由奔放な発想で語る。言葉遊びのようでいて鋭い洞察に満ち、読む者に言葉の面白さと奥深さをあらためて感じさせてくれる講義録。

演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）

土曜・日曜・祝日（月曜以外） 10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休室日】

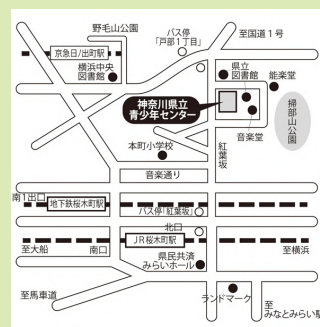
月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。

ホームページをご確認の上、お越しく下さい。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ■ケル・ペッパー ■京浜協同劇団 ■劇団河童座 ■劇団唐ゼミ☆ ■劇団コピュラ
- 劇団年輪 ■劇団820製作所 ■劇団まきじゃく ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゆうくりあ ■虚空環幻想レーゲンハイト
- Theater Company 夜明け ■theater 045 syndicate ■ドリル饅頭 ■プラスチックな月 ■まりこ☆みゅーじあむ
- MPiNK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川) ■横浜小劇場(横浜演劇研究所附属) ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 97号

【発行】一般社団法人 神奈川県演劇連盟（2026年3月31日）

【編集】オッスタかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、
中山朋文（theater 045 syndicate）、宮田信宏（劇団年輪）、こんのかつゆき（劇団コピュラ）

【ホームページ】<https://kenenren.or.jp/>

